

軟式庭球部

設立	1952年頃
部長	枇々木 規雄(管理工学科)
現在の部員数	23人(2014年1月現在)
OB/OG連絡先	清水 洋二(暫定)
OB/OG人数	400人(推定)
部誌	慶應義塾大学軟式庭球部報 (1960~1971)

創部時代の思い出(敬称略)

軟式庭球部の創部は、藤原工大が日吉に創設されて3年目の1942年(昭和17年)にさかのぼる。学校当局の許可を得て同志を募り、上田部長、荒木副部長に40余名の同士を得ての出発であった。

同年6月13日午後6時から新橋駅構内食堂で部の創立記念会を上田、酒井と部員17名の出席を得て盛大に開いた。

コートは学校と相談の上、日吉校舎から十丁離れた場所に新コートを造成した。コートの造成は、作業回数30回、参加者36名、延べ二百数十名を数えるに至り、夏休み前に1面が完成した。

「我々のコートは極めてお粗末だ。しかし自分たちのコートで庭球をやるのはこの上なく愉快だ。」「部は今後とも遅々ではあるが著々として発展するであろう。」(予科誌第2号 宗田記)と洋々たる前途への希望が語られている。

戦中戦後の混乱の中、一時記録が途絶えたが、

1954年(12期)11名、1956年(14期)20名の軟式庭球部員が卒業アルバムに掲載されている。また、最古の名簿(1952年版)には、1956年卒の町田彬、中塚和郎、田中良昭の3人がおり、この頃に戦後の活動が再開されたものと思われる。

1954年には既に小金井グラウンドの南端に硬式庭球部との共用テニスコートが3面あった。当時は競技志向というよりレクリエーションの気分で楽しんでいたので、学科対抗などの行事では選手が足りず、硬式の選手を動員した。

1957年卒は部員8名であり、何かの縁で跡見学園の女子大生との交流試合をしたり、部活動費用捻出と称してダンスパーティーを開いたり、そのちらしにつられての入門もあったとか…。

ちょうど、軽井沢での美智子妃の話題でテニス人気の華やかであった頃であり、静岡の鷺津での春合宿(1960年頃)では地元の富士紡績の女子部員との交流試合やその後の合同コンパは当時を知る者にはいまでも話題の出来事である。



12期卒業アルバムより 1954年

小金井時代(1960年~1971年)

1960年~1971年の活動は、慶應義塾大学軟式庭球部報(慶應義塾体育会軟式庭球部、三田軟式庭球倶楽部、三四会軟式庭球部、三四会軟式庭球倶楽部、工学部軟式庭球部 共著)に発見できる。なお、1965、67年には軟式庭球部の活動報告がない。

小金井の食堂横にコートを持ち、恵まれた環境で活動を進め、学業との両立に苦しみながらも近隣大学との交流にも積極的であった。



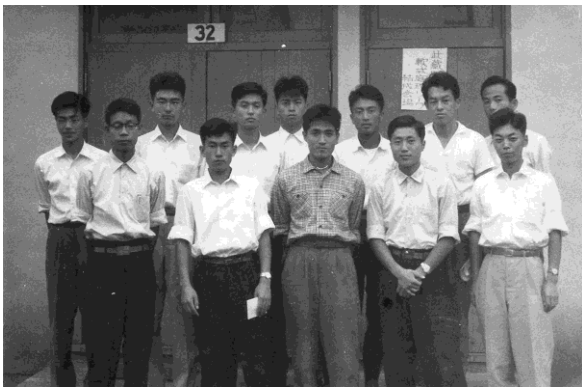
田野、中込組の練習 小金井 1958



1959年夏季練習



1960年3月鷺津での合宿
前年秋にそろいのユニフォームができた



武蔵野地区七大学軟式庭球部結成大会
第一回大会準備のために、慶應工学部と学芸大が
当番校となった 前列右から2人目は学芸大井内氏
慶應大学工学部（小金井キャンパス）にて

部の雰囲気は、和気藹々としたものであり、主将を始め、歴代の部員は悩みながらも常に一步前進を目指して活動していた。

本資料によると 1955 年前後が工学部軟式庭球部の第一次黄金時代であり、他の大学を圧倒していた。然しながら 1957 年には部員数も減り、大学に入る迄テニス歴の無い人が多かった。

1958 年から経験者の入部が増え、1959 年度は、幽霊部員も含め 50 人を超えていた(レギュラーは十数名)。

1962 年頃卒の大野鎮雄、長坂惣一郎、森功、縣

忠雄、武藤勲他の功績によりそれ以前より随分レベルが上がった感があった。

部報には、武蔵野リーグや理工科系大学リーグの発足の記録があり、医学部や学習院大学や体育会二軍との交流戦などで随分対外試合も増えた。

小金井時代は土のコートだったのでローラーかけとライン引きが必須で、手入れ不足だとコートが駄目になることもあって硬式庭球部員数と交互に実施しており、毎日誰かがコートにいた。

ただし、隣接の多磨霊園や畑の埃で革靴は真っ白になるほどだったので、冬場以外は裸足・下駄で通学して練習後は水道で足を洗って気持ちよく帰宅した猛者もいた。

以下、部報に従って具体的に歴史を眺めてみる。

I. 1960 年部報 (1959 年の状況報告)

1959 年には、農工大、慶應が発起校となり、小金井近傍の東京学芸大、電気通信大、成蹊大、一橋大、日本獣医畜産大の 7 大学参加による「武蔵野地区大学リーグ」を立上げ、初代当番校として

10月24、25日の両日に第一回大会を開催、学芸大、一橋大に次ぐ3位の成績を収めた。

◆「(部報への)初参加の弁」

塾内軟庭部の親睦と成績発表を兼ねた会誌があることは、日吉の1年間を三田軟式庭球部に籍を置いた人を通して、我が部にも伝わっております。三田と小金井とは地理的事情から、あまり密接な関係は無いようです。そこでせめてこの部報を通して、我々の部の現況をお知らせしようと思います。初めて参加するに当たりまして、いろいろお骨折り下さいました、川上さんを始め部報編集部の方々に厚く御礼申し上げます。

工学部軟式庭球部一同

II. 1961年部報(1960年の状況報告)

水上主将の下、優勝のチャンスはあったが実現できず、練習不足とチームワークの重要さを痛感した年であった。1960年から先輩を中心とした工学部軟式庭球部球友会をスタートさせた。

◆「今年こそは」

嫌な試験も終わり武蔵野にも春が訪れ今年こそはと大きな野心を持ってコートに立つときが又巡ってきた。この大きな野心とは夢のような話かも知れないが全ての対抗戦に優勝することである。

昨年のことを考えてみれば、昨年は我が工学部軟式庭球部にとって幾多の優勝のチャンスを持った年だったような気がする。しかし残念ながら一度も優勝することができなかった。この第一の原因はチームワークにあったように思われる。特に2年生(僕がその代表人物であったようだが)が練習をさぼり部にとって一番大切なチームワークを乱していたような気がする。

僕はつくづくチームワークの重要さを感じたものであった。たとえ実力があっても部員の団結なくして対抗戦に勝利はありえないということを…。

このようなことを考えても今年はチームワークの養成を第一目標にして練習に励んでいきたいと思っている。

工学部軟庭部は体育会軟庭部と違って、授業時間等の関係から全員一緒に練習できるのは週一

回程度なので、どうしても練習がいい加減なものになってしまう。このような不利な条件を克服するのは主将を中心とした部の団結以外に何物もないと思っている。少ない時間に全力を尽くして練習し、それによって立派な戦績をあげることができれば学生時代の良き思い出になるのではなからうか。幸い我が軟庭部には立派なテニスコートもあるし、今年から先輩を中心とした工学部軟式庭球部球友会が活動を開始することになった。今や軟庭部は数年前に比較して格段の進歩をしているのである。この発展途上の軟庭部をますます発展させ黄金時代を実現することこそ、苦勞して部をここまで育ててくださった諸先輩に対する最高の贈り物であり、また我々の義務であると思う。

部員諸君!! 工学部軟式庭球部黄金時代実現のために一歩でも前進するように努力してくれ給え。諸君の一歩の前進がそのまま部の前進になるのだから…………… (主将 長坂 惣一郎(応化三))

III. 1962年部報(1961年の状況報告)

長坂主将の下、医学部を圧倒、理工系リーグで芝工大に次ぐ準優勝、武蔵野選手権で準優勝した。部の活動としてダンスパーティー(記述のまま)、球友会(OB会)を開催、躍進した年であった。

IV. 1963年部報(1962年の状況報告)

大瀬主将が7月まで引き受ける異例の事態となり、部の団結を試される年となった。

「和気あいあいとした雰囲気無くさずに、約束を守って練習・試合に参加する」ことを目指した。

—————【対戦記録】—————

◆対医学部戦(5月20日:工学部コート)

工学部	③	—	2	医学部
安達(逸)・勝本	⑤—1			関・田代
大之木・神出	⑤—3			片山・磯野
武藤・大瀬	⑤—1			田中・軍
長坂・伊藤	2—⑤			大城・石井
小松・安達	0—⑤			長久保・間森

・正規のメンバーがそろわず、大変苦しい試合であったが、初出場の神出の活躍と安達(逸)・勝本組の奮闘で、かろうじて勝つことができた。

- ◆春季理工系リーグ戦 (5月26日：桜町コート)
予選リーグ：Bブロック2位 (3勝1敗)
準決勝トーナメント：慶應0-⑤芝工大

- ◆対医学部戦(11月18日：工学部コート)

工学部 1 - ④ 医学部

- 長坂・大瀬 ⑤-1 田代・大橋
- 県・安達 2-⑤ 長久保・間森
- 平原・北村 1-⑤ 片山・磯野
- 小松・伊藤 3-⑤ 大城・石井
- 日笠・勝本 2-⑤ 田中・関

- ◆秋季理工系リーグ戦(11月23日：順天堂大)

予選リーグ：Bブロック1位(3勝)
準決勝トーナメント：慶應③-2法政
決勝リーグ：3位(1勝2敗)

- ・決勝リーグにおいて春は、④-1で勝った理大に敗れたが、これはほとんどジュースにもちこまれてポイントを失ったもので精神的弱さを暴露したといえる。今後の奮起を期待したい。

V. 1964年部報(1963年の状況報告)

北村主将の下、部の運営に四苦八苦している様子であり、それを引き継いだ64年の小山主将は、63年の状況報告ではなく、「スポーツを通じて人間性を養う」ことに徹することを宣言した。

VI. 1966年部報(1965年の状況報告)

- ① 是空 小松 一紘(1963年卒)
- ② ミズシマより 勝本竹彦(1964年卒)
- ③ 新しく入部される人へ
萩原芳彦 (1964年卒)
- ④ 工学部軟庭のあり方

VII. 1968年部報(1967年の状況報告)

鷺見主将の下、春の合宿は、3月20日~27日和歌山県加太の国民休暇村で12名の2年生で開始、後に21人まで参加者が増えた。やはり、部活動の停滞を嘆き、悩み多き活動であったが、部報への報告は格段と増えた。

- ① 雑感 長沢 力(1968年応化卒)
- ② 3C+C=4C 2S+S=0 主将 川上 義
- ③ 第一印象 副将 大枝 一郎
- ④ 春の合宿 主務 安藤 耕次

- ⑤ 宗教について 元栄 川常(電気3)
- ⑥ 一年を振り返って 岩久 保信(機械3)

VIII. 1969年部報(1968年の状況報告)

工学部の移転を控えた記述が掲載されている。

- ◆「消極性」

「双六の上手といひし人にその手立てを問ひ侍りしかば『勝たんとして打つべからず、負けまじと打つべき也、……』という言葉がある。

勝負のときに勝とうと思っはいけない。負けまいと思っ打つべきである。あの手この手の中で、どんな手を打ったら早く負けるか、それをよく考えてその手を使わず、一球でも遅く負けるようつくすべきだと教えているのである。

勝負である以上、誰でも勝とうと思うのは当然である。ところが勝とうと思っときの積極性を戒めるべきであるといふのである。勝とうと思っその積極性の中で我々が陥りやすいのは、空想的な性質である。あるコースを攻めるとき、ポイントできるという確信をもっ打つわけだが、その気持ちの中にうまくいったらポイントできるであろうという賭博性が含まれていっと思っ。積極性そのものは大切であるにしても、積極性の持つそのウナを心得ておかなければならない。しかし、負けまい、負けまい、といふ消極性が委縮した気持ちに陥らせることも戒めなければならぬ。

この戦術は当たるか当たらないか判らないが、やってみようと思っチョビツたり、アタックしたりするのははなはだ危険である。攻めの一手で、「逃げる」といふ観念がないのは、戦術的にきわめて幼稚である。消極性の上に立っ粘り強さといったものが必要であると思っ。もう少しラリーを続っ様子を見よう、アタックを止めようと思っ心が大事である。この中止といふことは、人間の最も大切な知恵の一つである。「速やかに止む」といふ決断の知恵が必要である。ここで一本かっこ良いところを見せよう、といふ気持ちは捨てるべきで、一つぐらゐの失策で止めておきたいと願うべきである。自分の実力以上のことを考えないときに、自然の進むとき、自分の技量が遺憾なく發揮されるのである。(主将 及川 雄一郎)

IX. 1970年部報(1969年の状況報告)

森上主将の報告で日吉の矢上に5面のコートができる予定である旨の記録がある。

◆「春の合宿で得たもの」

3月30日の午後6時からコンパが始まった。始める前に部長が一人一人に合宿での反省を言わせた。自分は、次のようなことを発言した。「工学部は、今小金井と日吉に分かれているので、ふだんは、あまり先輩たちと会う機会がないけれど、こういう合宿を通じて先輩、同輩が一体となって球にぶつかっているところに合宿の意義があったように思えます。技術面ではあまりうまくならなかったけれど、東京へ帰ってからまた一生懸命頑張りたいと思います。」

春合宿は3月22日の夜から始まった。最初の3、4日間は、非常に足が痛く、屈伸・ランニング・球拾いなど苦勞し、そのためにだれてしまったような感じだった。でも合宿も後半となると、足もやや軽快となり、また何よりも諸先輩の方やOBの方が、入れ代わり立ち代わり参加してわれわれを指導して下さったので、精一杯頑張ったつもりであった。しかし夜のミーティングで、レギュラーの方達から「練習中に声が出ていないし、初心者は、もっと乱打を多くやって基礎をしっかりとさせた方がよい」とか「初心者は、夏の合宿以来技術面では、あまり進歩がみられない。もっと研究心を持つように」など指摘されいささかガックリしたこともあった。

今回の合宿で一番強く感じていることは、毎日毎日が自分との戦いであったということである。人がどんな状態であれ、精一杯やる。みんなが同じように疲れているのだし、声を出すことも人のためではなく、自分の気持ちを引き締めるためにやるのであるし、とにかく全力を尽くしてやることが結局は、自分に還ってくるものが多くなるということがわかった。(古谷 博司(2F))

X. 1971年部報(1970年の状況報告)

猪俣主将の下活動したが、「同好会」化した部の雰囲気の中での練習の限界を報告している。

◆「主将となって」

今年主将となり部を運営し始めたが、次のよう

な問題に突きあたっている。このことは、ここ数年の課題だったことであるが、部の「同好会」化である。このことは、ある意味では必然である。その理由は、現在約30名の部員(2~4年生)がいるわけだが、彼ら(私も含め)一人一人テニスに問いつける考えが違っている。そしてこれらは次の二つに大別できる。すなわち勝つためのテニスと、楽しむためのテニスである。現在の部員の過半数が後者であることは確かであろう。よって大多数の部員のための練習となると、以前に比べ「同好会的」になるのは必然であろう。

しかし、我々は試合に勝つことを課せられており、そのための練習は私も絶対必要であると考ええる。何故ならその練習は技術を最も確実にあげる方法だからである。さりとてその練習だけをするわけにはいかない。過半数の部員を置き去りにすることはできないし、そのことは部の運営を困難にするだろう。その解決のため、私は昨年個人的に練習の質を変え、勝つためのテニスを練習したつもりである。しかし、このことをレギュラー全員に要求することは無理だろう。結局我々の週2回使用、コート1面の練習では解決できない問題だろうか。今後の課題として、常に考慮に入れなくてはならないだろう。(主将 猪俣 春夫)

XI. 1972年部報(1971年の状況報告)

各自がさまざまな思いを報告している。

- ① 庭球と将棋 森上 好雄(1961年卒)
- ② 雑感 猪俣 春夫(計測4)
- ③ 動き 石橋 伸康(管理3)
- ④ 気まま 副務 三沢 正彦(計測3)
- ⑤ 自覚 西川 勉(2年)
- ⑥ テニス部に入って 庄司 貞宏(2年)

XII. 1973年部報(1972年の状況報告)

軟式庭球部報に掲載した最終年度となる。矢上コートが完成し毎日練習できる環境になった。

◆「断想」

ジリジリと照りつける、太陽。きちんと準備された、誰も居ない、テニスコート。白帯が、ピンと張って美しい。僕には、この空間が、最も完成された空間のように思えてならない。何年という

歳月を経てきたことを、どこかにじっと秘めて、ひっそりとした、佇まいを見せる、コート。去年と同じようだがどこか違っているのだ。変化したのは僕自身か、そうかもしれない。僕にもコートにも一年という時は存在し過ぎ去ったのだ。

矢上台移転により、小金井コートは廃止される。僕は、この間最後の残りを片付けるために一人もう閉ざされていた小金井の部室へ行ってきた。荷物をまとめて、さて帰ろうとして、ちらっと何気なくコートをふり返った。見えたのは半開きになった、壊れた戸、おぼろげになったライン、すみに生え始めた雑草。誰も居ない、人気の失せたコートでした。そのときは、別にそれきりで帰ったのですが、今コートという言葉により思い起こされるのは、あの小金井コートなのです。何年もの間、先輩達が汗を流し、動き回ったコート。

そして僕らが汗を流し、ローラーでならし、ラインを引き、転んだこともあったあのコート。そのコートが僕には仕事を終え、雑草を繁らせ自然に還ろうとしていたように思い返されるのです。

僕は、ご苦労さんでしたと言いたい気持ちです。このことは、僕を、すっきりとした感傷へとさそいます。コートの死というのでしょうか、コートの歴史とでもいうものを観たような思いがするのです。

春には、矢上に新しいコートが出現する予定です。いわば2代目です。僕は新しいコートの前身として、先代小金井コートが在ったことを忘れないでしょう。あの、雨の後には、きまって水溜りができ、秋には枯れ葉の積もるコートのことを。

ファイト!

(森本 秀敏)



矢上コートでの練習 2010年



練習(一本打) 2013年7月 山中湖

矢上移転後

矢上移転後は、現在のところ正式な部の活動記録が発掘されておらず、各年代のOBが有志でそれぞれのOB会を実施し、旧交を温めている。

しかしながら、各人の胸に刻まれた思い出は、小金井時代の記録に大いに共感するところである。最近の様子を紹介して筆を置く。

(1980年電気卒 清水 洋二)

◆日常の活動状況

全体練習週 3回(水・金・土)：矢上キャンパス

◆対外活動(大会出場)

関東理工科系大学ソフトテニス連盟に所属、年2回の関東理工系リーグ戦(6月頃：春季個人戦・団体戦、11月頃：秋季個人戦・団体戦)

◆主な戦績(過去3年)

2011年：関東理工系リーグ春季団体戦2部優勝

◆その他

- ・ 4月：新入生歓迎活動(日吉キャンパス)
- ・ 8月：山梨県山中湖村にて夏季合宿
- ・ 3月：追い出しコンパ
- ・ 9月：OB戦(矢上テニスコート)

(文責：枇々木 規雄)



2011年春理工系リーグ団体戦2部優勝!